

岐阜県支部だより

- 1 巻頭言
- 2-3 支部研究会報告
- 4 事務局より

第14号 平成27年3月31日 発行

巻頭言 「つながり」

岐阜県支部

飯田 孝栄



「養護教諭は、子どもたちの心にも関わる大切な方ですね。SCにとっては、言ってみれば命綱のような役割を果たしてくださる方。そんな大切な立場をあえて辞め、臨床の道に進まれるのは何故ですか？」・・・数年前、あるベテランの臨床心理の先生から言われた言葉です。養護教諭であった私は、そのような表現をしていただけたことに大変感動すると共に、先生の包み込むようなとても温かいオーラに胸が熱くなる思いでした。

平成3年—日本学校教育相談学会岐阜県支部が設立され、当初は教員だけでなく様々な立場の方が研究会に参加されていました。私にとっては、これまで自分の中で大切にしてきた「つながり」を学ぶ場、そしてまた、少し時間はかかりましたが最終的に臨床の道に向かう入り口だったような気がします。

SCになって、小・中・高に勤務してきましたが、とても有り難く思っている「つながり」があります。それは、教育相談担当の先生方の配慮です。校内の支援を必要とする子どもたちや保護者の方々、時には落ち込んでいる先生を把握し、面接を組む。面接が終わればSCが関係の先生との交流できる場と時間を設定する等・・・「命綱」としての「つながり」を感じています。少し残念な「つながり」もあります。それは支援を必要とする子どもを中心に、保護者と先生との関わりがうまくいかないと感じることが多くあることです。ここは「理解綱」作りとしてSCが丁寧に編み込んでいくところかもしれません。また、外から入

った方々の、子どもたちの捉えや思いを広められる場を持っていただくことによる「つながり」は、太い「支援綱」として是非作り上げていただきたいと希望するものです。

先日、欠席をして悩み続けていたA君にやっと会う事ができました。保護者とはその様子から“安心して悩める場、見守る、信じる”ことについて一緒に考えてきました。何か吹っ切れたような笑顔のA君に私は、「どうして会う気になったの？」と尋ねると、A君は、「母が先生に会って帰ってくると何か変わるんです。だからどんな人か会ってみたくになりました。」・・・本当に嬉しかった出来事でした。それは、私が何かをして変わったという事ではなく、「つながることができた」という事実、「つながり」を支えてくれた方々に出会えたという感動です。

さて臨床心理の先生の質問、「何故・・・？」ですが、私は「養護教諭として十分だったとは言えませんが一生懸命子どもたちの心に関わってきました。その経験も生かしながら今度は立場を変えて、先生方や子どもたちを支えるつながりを作っていきたいと思います。きっと今まで見えなかったものや気付かなかったことが一杯あると思いますが、それも生かして心の成長に関わっていききたいのです。命綱を引いてもらう立場に立つことも私自身にとって必要かと。」とお話しました。答えになっているかいけないか・・・「いいSCになってくださいね。」と微笑まれた中にたくさんの激励と、専門職として負う責任の重さを感じました。

☆ 支部研究会報告 ☆

◇第3回研修会◇

開催日：平成26年10月25日（土）
会場：恵那市中コミュニティーセンター
参加人数：32名

今年度の新たな試みとして、岐阜地区を離れた研修会を行いました。30名を超える参加者があり大変好評でした。会員外の参加者も目立ち、岐阜県には教育相談を学びたいと考えている先生が多いと強く感じました。

① 全体会

○開会のあいさつ・ 夏季研修会報告

② 講演会

テーマ「全員が所属感を感じる学級経営
～個に力を付け、集団を高める教育相談を～」

講師 岐阜大学教育学部 非常勤講師

大竹 恵子 氏

② 事例研究会

○クラス替えない少人数学級における集団
作り ～Q-Uの結果を踏まえた指導～

恵那市立三郷小学校教諭

石井 豊晃 先生

○「認め合うことを大切にした学級作り

～Q-Uの結果をもとにして～

中津川市立第一中学校教諭

中島 健 先生

研修会の内容は上記の通りですが、実際に参加された方の感想を紹介します。

- ・ 大竹先生のお話を聞き、反社会的な行動をとる児童の心をつかむコツのようなものが少し理解できました。
- ・ 大竹先生のお話を聞いて生徒とともに教師が成長しないとだめだなと感じました。
- ・ 自分の本務は教科指導であることを忘れず、どの生徒も「わかった」「できた」という達成感、充実感を味わえる授業を提供していきたいです
- ・ 個と集団を育てるといふ、普段の授業で常に意識せざるを得ないことについてお話を聞くことができ、集団指導と個別指導をどのようにしていけばいいかということについて改めて考え

ることができました。

- ・ Q-Uを行うと、個々の生徒をどうするかというものになってしまいますが、学級の中で所属感を持たせるためにSGEやSSTを計画的に取り入れていきたいと思いました。職員同士のSGEもやりたいと思います。
- ・ とても楽しかったです。特に事例研究では自分が抱えている課題についての糸口をつかむことが出来ました。

紙面の都合上、すべての感想を掲載できず申し訳ありません。参加された方々、ご協力ありがとうございました。（文責：大坪一才恵）

◇第4回研修会◇

開催日：平成26年12月20日（土）
会場：朝日大学（岐阜県瑞穂市）
参加人数：18名

毎年第4回の研修会は、事例研究にじっくり時間をかけます。参加された先生方からは、「小・中・高・特の様々な立場の先生方のお話が聞けて、来てよかった」「少人数で2時間かけて一つの事例に取り組めたことは多くの学びがあった」などの声が聞かれました。

複雑な家庭環境からくる心のゆがみを抱えた生徒への対応 ～A君の心の安定を求めて～
岐阜市立精華中学校 教諭 関戸 美枝子先生

複雑な家庭環境にあり、感情をコントロールできずにすぐに人に手を出すなど、再三指導しても問題行動を繰り返す生徒に、教師がどう働きかけていくかの事例研究でした。

障がいなのか、個性なのか。交流で真っ先に出た言葉は、「担任が関戸先生でよかった。」ということです。「担任との関係が良好だからこそ、これだけの問題行動で済んでいる。生徒自身が思いを素直に話せる関係を大事にしたい。」というご意見でした。ともすると、担任一人が抱え込みがちですが、学校全体で管理職、養護教諭、コーディネーター、専門機関など、それぞれの体場からサポートしていく必要があります。また、家庭問題に学校がなかなか介入できないという問題点もあります。まずは生徒の両親に、学校としての

統一見解をもち、粘り強く働きかけていくことや、A君ばかりでなく学級全体の子供の価値観を高め、モラルを育てていく指導を行っていくことの大切さを参加者全員で確認しました。“育てる教育相談”の大切さを実感しました。（文責：佐藤礼子）

別々の理由から集団になじめない生徒を複数抱えた学級での対応 ～学校内外の連携を軸に～
中津川市立福岡中学校教諭 加藤 祐輝先生

今回の事例研究では、事例提供者より学級について簡単な説明があった後、Q-Uの検査結果をもとに、気づいたことを参加者が各自付箋に記入するところからスタートしました。その後、学級へのアプローチと個へのアプローチについて話し合う中で、リーダーの育成、子供たちの集団の満足感のとらえ方、男女の課題、学習指導、進路指導など、様々な視点から活発な意見が交わされました。事例提供者の先生は最後に、「まだまだできることがあると分かった。自分のクラスの事をみんなが考えてくれることがうれしかった。できる



ところから始め、他の先生と一緒に取り組んでいきたい。」と感想を述べられました。

（文責：大坪一才恵）

◇第5回研修会◇

開催日：平成27年2月14日（土）
会場：朝日大学（岐阜県瑞穂市）
参加人数：約40名

●講演会

学級復帰に向けて
～適応指導教室だからできること～
講師：神奈川県教育カウンセラー協会理事
川端 久詩 氏

『エンカウンターで不登校対応が変わる』（図書文化）にもご執筆なさっている川端先生のご研究とご実践の中から、「不登校の真の解決」「適応指

導教室の支援目標」「人間関係や教科学習などのセイン内容」「学校との連携」などについて、貴重なお話を伺うことができました。

花輪敏男先生の『FR式不登校対応チャート』をもとに、不登校の子供は「自分で考え、自分で決めて、自分で行動すること」ができるよ



うになったとき、結果として学級復帰するということや、不登校対応チャート6段階についてご講演いただき、ゴールを確認するとともにそこに至るまでの細やかな配慮やスキルを学ぶことができました。また、学校復帰に向けては適応指導教室が学校に接近するために様々な仕掛けを用意することが必要だということもご教示いただきました。

●事例研究会&実践交流会

- ①「学校復帰に向けての支援の在り方
～学校と適応指導教室の連携を通して～」
可児市適応指導教室 飯田 佳子先生
- ②「高等学校における発達障がいがある生徒への支援 ～教育相談担当の立場から～」
加納高校教諭 木村 義子先生

参加者の希望で二つのグループに分かれ、それぞれの事例を通じて学び合いました。グループ①では、講師の川端先生が適応指導教室で実際に実施なさったエンカウンター等による子供たちの変容についてご報告があり、大変興味深く伺うことができました。参加者の話し合いの中では、「自己を見つける時間を大切にすること」や「教室で見せた子供の姿を伝え、周囲の見方を変えるきっかけを作ること」や「WISCなども必要に応じて行い、その子供への理解をさらに深め学校につなげること」など、子供を「育てる」ために必要な様々なことを再確認できました。

また、グループ②の参加者からは、「高校の事例ということで興味深く、とても参考になった。」「教室にいる発達障がいの子供や保健室を居場所とする子供など、日頃関わっている子供たちへの支援について考えることができた。」といった感想が寄せられました。（文責：大坪一才恵）

事務局より

連携の必要性和重要性

「川崎中1殺害事件」に関する報道が連日連夜、世間を賑わせています。事実が詳しく分かるにつれて、もっと早くに手が打てなかったのだろうかと思わずにいられません。そのような中で、スクールソーシャルワークという言葉もよく耳にします。この事件の背景に、家庭的な貧しさや苦しさも見え隠れするからです。

スクールソーシャルワークについては、岐阜県支部でもその重要性に注目し、25年度に大阪府立大学教授、山野則子先生の講演会を開催しました。今後ますます、注目され、スクールカウンセラーと並び、学校現場を支える存在として活躍していただけるものと信じています。

さて、スクールカウンセラーやスクールソーシャルワーカーの存在に注目が集まってくると、気になってくるのが、その連携の在り方です。スクールカウンセラーは既に多くの学校で活用事業が始まっているのでよいかもかもしれません。しかし、スクールソーシャルワーカーとなると、まだまだ多くの学校で、連携の仕方について戸惑っているのではないのでしょうか。

最も、まだ岐阜県内では、スクールソーシャルワーカーの派遣事業を活用している学校は少なく、市単位で採用しているところも少ないのが実情です。連携はこれからといったところも多いことでしょう。しかし、実際に始まってみると、戸惑う場面は多いようです。

「窓口は、誰がやるの？」

「何が正式な業務なの？」

「家庭訪問はしてもらえるの？」

「ケース会議には出てもらえるの？」

既に採用している学校から聞こえてくる声は様々です。学校内では解決できない問題が多くなってきているからこそ、上手く連携して、スクールソーシャルワーカーによる援助を期待したいところです。

実践から見える姿に燃える

ある中学校を訪問しました。その学校では、Q-U

調査をアセスメントに利用しながら、学級の実態に合わせて、様々なグループアプローチに取り組んでいます。教師集団も4月当初はあまり熱心に取り組む様子ではなかったのですが、活動を重ねていくうちに生徒の反応がよく、徐々に教師側にも火がついていったそうです。今では、その学校の印刷室前には、様々なグループアプローチの書籍が並び、多くの職員が利用しているそうです。そのような話を聞いているうちに、ふと以下のようなエピソードを聞きました。

ある日、校長室の前に数名の女子生徒が並んでいました。

「校長先生にお願いがあります。」

生徒達の代表が口火を切ります。

「私たちの学級は、来年度も同じ仲間に進級させてください。お願いします。」

決して身勝手な判断で言い出す生徒達ではないので、返す言葉に躊躇したそうです。

勿論、グループアプローチだけで起きてきたことではないでしょう。日々の授業、様々な行事を通して培った生徒同士の関係づくりが、絆を強くしていったのでしょうか。しかし、その学校の校長先生がおっしゃいました。

「ちょっとした授業の合間や、朝の学活などの時間を利用して、様々なグループアプローチをしようとする職員が増えてきている。生徒の笑顔が増えてきたのも嬉しいが、職員の活気が出てきているのも嬉しいよ。」

生徒の姿で手応えを感じれば、やる気になるのも当然です。まさに予防・開発的な教育相談の実践そのものだと思います。

岐阜県支部としてもグループアプローチの進め方や学級経営の進め方など予防・開発的な教育相談について、さらに研修の場を増やしていこうと考えています。是非、多くの皆様の参加をお待ちしています。(文責：事務局長 木村 正男)

日本学校教育相談学会岐阜県支部会報第14号

2015年(平成27年)3月31日発行

発行:日本学校教育相談学会岐阜県支部

編集:日本学校教育相談学会岐阜県支部広報委員会

ホームページ: <http://www1.ocn.ne.jp/~sodangif/>

E-mail: sodan-gifu@plum.ocn.ne.jp